



北海道の雄大な川はどこにあるのか？

竹中 万紀子

(たけなか まきこ)

東京生まれ。
筑波大学大学院生物科学研究科単位取得。北海道東海大学、北海学園大学非常勤講師。
豊平川ウォッチャーズ代表。専門は鳥類生態。川と身近な自然の保全に取り組む。

「圧倒的なスケールを誇る十勝川。日高、十勝、大雪から集まる清水は、シーズンを通して安定した水量を確保します。流域面積、道内二位はダテじゃない！」「十勝の大自然を満喫……」「北海道の大自然の贈り物……」といった観光キャッチフレーズは多くの観光客の北海道への憧れやノスタルジーをかきたてる大きな要素になっていることは間違いないだろう。道外からの観光客だけではない。こういったキャッチコピーによって道民自身も幻想を抱いているのではないだろうか？

そして、勘違いしてしまっているのではないだろうか？
確かに、手付かずに残された北海道の大自然は雄大で素晴らしい。しかしである。近年、インターネットでランドサット画像が比較的自由に見られるようになってきているので、機会があったら夜の地球の画像をぜひ見てほしい。日本列島があたかもイカ釣り漁船団のように光り輝いている。黒く闇に沈んだ部分は人の手がいっていない場所であ

る。北海道内で光っていないのは、大雪山系のほんの一部だけ。東北地方の奥羽山脈の南北に長く続く漆黒の帯と比べるといかに少ないことか。

そして、北海道の雄大な川は本当に「雄大」なのだろうか？ 客観的に見てみる必要があるだろう。二万五千分の一の地形図で本州と北海道のいくつかの河川の姿比較してみよう(図1)。上流付近は日本のどの川も山塊の中を流れており、ダムや砂防ダム以外は基本的には構造的に大きな差はない。大きな違いが観察されるのは、扇状地とその上流であるところの、中流から下流にかけての範囲である。

図の左側に本州の三河川の地形図、右側に北海道の三河川の地形図を並べてある。新潟県の阿賀野川(図1A)でもショートカットが行われてきており(地図中の矢印)、かつての河道より直線的になってきているが、そのダイナミックな蛇行はほぼそのまま残されており、草原、湿地、河畔林といった河川空間の多様性の存在が地図記号から判断す

る限りでも明らかである。

市内を多くの川が流れることで知られる仙台南辺では広瀬川と名取川が合流する(図1B)。注目したいのは河川空間の広さである。それぞれの川の築堤間の幅はゆうに五百mあり、合流点では一番広いところで1km以上もある。水脈筋の複雑さも注目してほしい。

そして、利根川の支流の一つである鬼怒川(図1C)。築堤間の幅は十勝川とほぼ同じであるが、広瀬・名取川同様、水脈筋(みおすじ)は非常に複雑である。さらに、築堤自体の形状も定規で描いたように単調にはなっていない。蛇行のために増水すれば水がのりやすい箇所は河川空間は広くとってあることも地形図から読み取れる。

図の右側に目を転じよう。一番上は、石狩川が当別、石狩、札幌市の周辺を流れるあたりの地形図(図1D)である。阿賀野川では、川の一部として温存された規模の蛇行はすっぱり切り離されている。築堤は定規で引いたようにまっすぐで(実

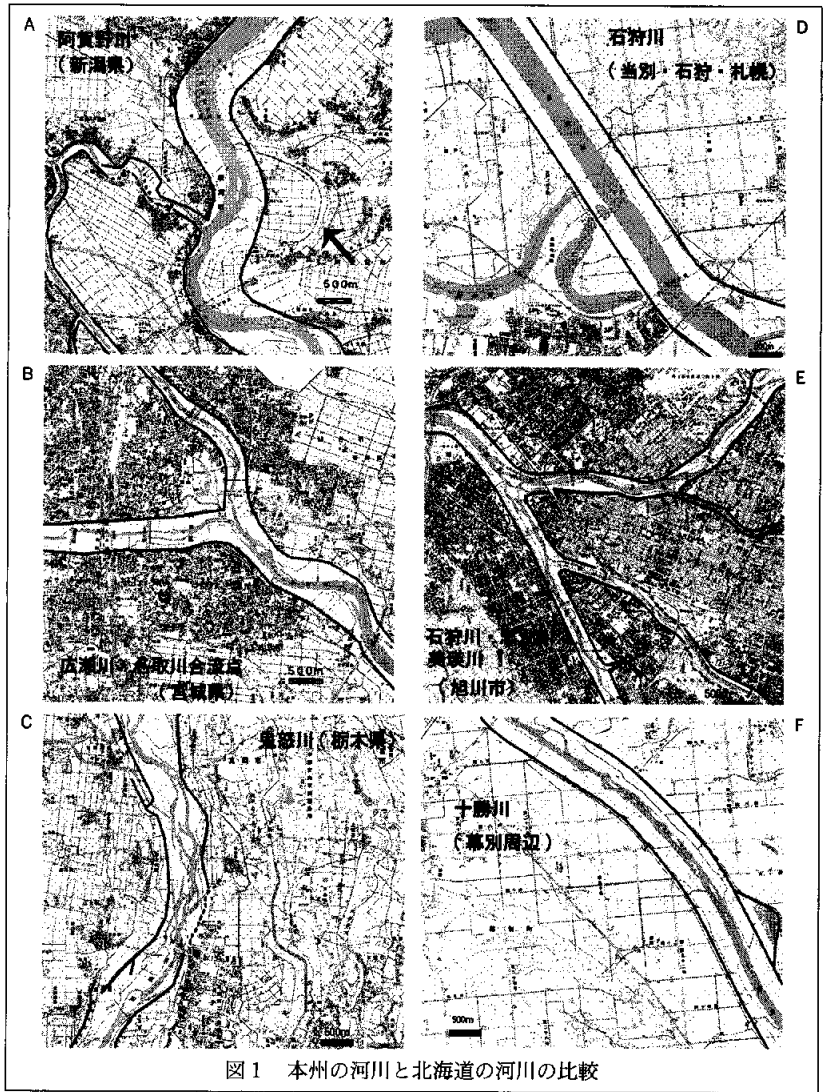


図1 本州の河川と北海道の河川の比較

際、定規で引いたのだろうが、本流の水脈筋は悲しいまでに単調である。ご存知の方も多いが、石狩川の総延長はかつて三百六十kmもあったのだが、このようにしても狭くショートカットで約百kmも短くなっているのである。

図1Eに示される旭川市内を流れる美瑛川と忠別川の築堤間の幅は広くても三百mほどしかない。水脈筋も築堤も仙台の川と比べると人工的だ。

「川の街」旭川にはお粗末なのではないか？ 図には示していないが、札幌の母なる川、豊平川の現状も同様であることは言うまでもない。

そして、十勝川(図1F)。石狩川と同様、悲しいほどに単調な水脈筋が、これまた単調な築堤幅の中を流れている。

これが、北海道の二大河川の今の姿なのである。北海道にはもはや雄大な大河は存在しない。雄大な

な川を見るならば本州へ行ったほうがよい。阿賀野川、信濃川、鬼怒川、広瀬川、四方十川、渡良瀬川……。これらの河川も、ダムや堰の造成といった固有の開発問題を抱えてはいるものの、北海道の川ほど徹底的に個性を否定されてねじ伏せられた姿を晒してはいないからである。

本州以南の地域と北海道の川の姿の違いを生み出した大きな要因は、川との付き合いの歴史の長さにあるのではないだろうか。

本州以南では歴史が書かれるずっと以前から、人々は地域の川の特性を熟知し、折り合いをつけながら生活してきた。川が暴れても十分に安全な距離を保ち、同時に川の氾濫がもたらす栄養塩などの恩恵を認識しながら、集落や農耕地を配置してきたのである。古代の貝塚や集落跡の遺跡の分布が示すように、川の性質を踏まえたこのような生活圏の基本的な配置には千年単位の経験がベースになっていると思われる。

一方、北海道では明治以降の急速な開拓によって、川とのつきあいの歴史と経験がないまま、したがって、何のしがらみもないまま、「近代的」な治水によって川の姿が大きく変えられてきた。本格的な治水が全道的に始まったのは明治時代後半であるから、わずか八〇〜九〇年という短期間で北海道の大河が現在の姿へと変貌したのである。

下流域における大規模河川改修がもたらしたもの

大規模河川改修は捷水路(しゅうすいろう)による蛇行のショートカットや篠津運河のような排水運河造成が進み、低地の冠水がコントロールでき

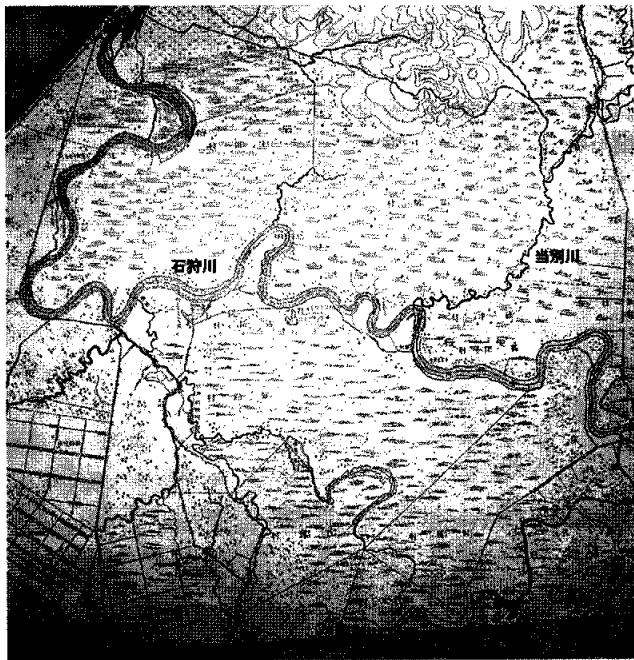


図2 明治期の石狩川周辺

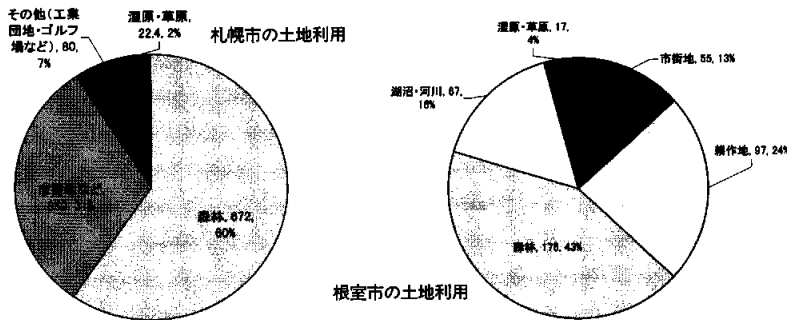


図3 札幌市(左)と根室市(右)の土地利用状況 (パーセントの前の数値は面積 (km²))

るようになった。これは農耕地の拡大につながった。農業が北海道の基幹産業となった背景には、このような大河川の下流域における大規模河川改修と排水事業があることに異論はないだろう。

石狩川や十勝川、空知川といった大河川の下流域は広大な泥炭湿地や草原が広がる地域であった。石狩川下流域の古地図をみると、釧路湿原の面積のゆうに十数倍はあったであろう。湿原が広がっていたことがわかる(図2)。広大な農耕地の確保と引き換えに急激に消失したのは、湿原性および草原性生物のハビタットだったのである。

札幌のような都市部では農耕地というよりはむしろ市街地の進展に伴って自然環境が縮小してき

たのだが、失われたハビタットは、平坦地にある湿原や草原であることは道内のほかの地域とかなり変わりはない。

都市の例として札幌市の現在の土地利用の状況を、耕地帯の例として根室市の状況を図3に示す。札幌市では自然草原(湿原を含む)が市の面積に占める割合は約二%である。一方、森林は市の面積の六〇%におよぶ。バードウォッチャーの間では、根室といえは春国岱という地名がすぐに頭に

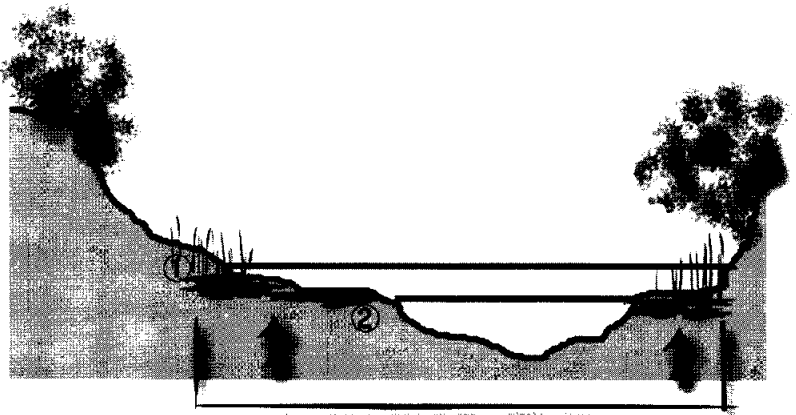
浮かぶくらい、草原性、湿原性の鳥が生息する草原が延々と広がっているようなイメージがある。しかし、現実にはイメージとはかけ離れたものである。自然草原や湿原は、根室市の面積のわずか四%前後しか残っていないのである。興味深いのは、根室市においても森林は比較的まとまった面積で残されていることだ。森林は傾斜地や山地に分布することが多く、利用しにくさも要因として考えられるが、草原・湿原の重要性の相対的認知度の低さも関連しているのかもしれない。

前述のように、都市部と農耕地帯の違いといえば、前者では草原や湿原が市街地に変わり、後者では農耕地帯にかかわりなく、草原と湿原が危機的なレベルまで減少しているのは誰の目にも明らかだろう。

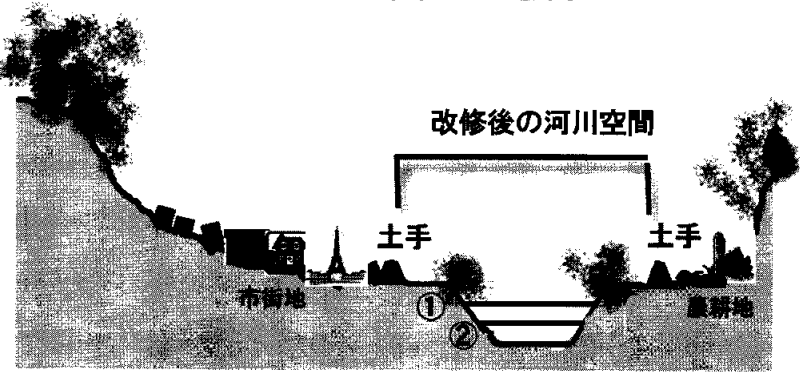
札幌周辺に生息する森林性鳥類のうち、国および道のレッドデータブックに記載されているのは、約八%である。草原性鳥類では約二四%にのぼる(猛禽類を除いた比率)。そもそも、草原性鳥類は森林の鳥に比べると種数自体が少ないのであるが、四種に一種がRDB記載種であるという事態の深刻さを認識してほしい。

十勝川や石狩川の下流域でみられるような「やりすぎ」ともいえるべき河川改修のもう一つの問題点は、河道が固定されたために(したがって、水の流れが固定されたために)、河川空間内のハビタットが単調になったことであろう。

図4の上のイラストで示すように、川の流れと陸がなだらかに接し、頻繁に(少なくとも二、三年から数年に一度は)溢水し河畔が水浸しになることで湿原や草原は維持されてきた。一方、同図



本来の河川空間



改修後の河川空間

図4 河川改修による河川空間の変化

の下のイラストのいわゆる「近代的な」河川改修を施した河川空間では河道は低水路を流れ、高水敷に水が乗ることが減多におこらないように、河川でダムや放水路で水量をコントロールされている。このため、高水敷は乾燥化が進む。乾燥化が進めば、湿地や草原環境は森林へと姿を変えていく。さらに、豊平川が典型的な例なのだが、流量の大半を上水用に取水（約七十％）している川で

治水上も問題となっている。しよつちゅう水に浸っていてじめじめしていれば生えてこないはずのヤナギ類などの木本が繁茂しすぎて、河道断面を狭めてしまい洪水の危険を増大させているのである。逆に、融雪増水の規模や時期のずれによっては直線化された河道を一気に大量の水が流れ出し、鳥の営巣に大きな影響がでることもある。豊平川

は中流域の水量が極端に少ないことや、土砂供給の減少や流失によると考えられる河床の低下も手伝って、低水路内でさえ水に洗われぬ場所が増えてきている。その結果、礫の河原や草原、湿地といったハビタットが河川空間内でも縮小しつつある。

放っておけば、河川空間は森林と水が流れる場所だけという単調な環境になってしまう。ここでも、最も影響を受けるのは草原や湿地の生物であるのは明らかである。この状況は、

生物の生息環境への悪影響だけではなく

でもイソシギやアオジが営巣を開始してから、ダムの放水や集中豪雨で一瞬にして営巣に失敗することがある。鳥だけではなく、川の中の生物にも影響があるとも言われている。河道が複雑であれば、被害をまぬかれる部分が必ず存在するはずなのだが。

高水敷の土地利用

草原や湿原は水の作用と密接に結びついたハビタットである。これらのハビタットは現在の北海道では河川が少ないながらもそれらをかろうじて提供できる唯一の空間となっている。

草原性鳥類が減少傾向にあることは、数年来、一般のバードウォッチャーも感覚的に感じているし、近年、減少を裏付ける報告も少しずつ増えている。中国東南部や東南アジアの越冬地の環境悪化も減少の要因として考えられているが、北海道側の繁殖地における繁殖適地の減少や土手や河川敷の草刈りや牧草刈りによる卵やヒナの喪失も無視できない大きな要因であろう。

草原環境の保全や復元は今や一刻の猶予もない状態にある。土手等の草刈のあり方を工夫するの草原性鳥類の繁殖地確保にとって有効だろう。

また、図5に例示されるように、運動公園、放牧地、採草地などの高度利用を容易にすべくデザインされてきた高水敷の形状を見直し（もちろん、それだけでなく水量などの見直しも必要ではあるが）、コストをかけなくても川自身の力で草原や湿原が維持できるように河川空間をデザインしなおすことも早急に取り組むべきであろうし、狭めすぎってしまった河川空間を広げたり、切り離した蛇

土手



図5 豊平川の河川空間

行を再び川の一部に取り込みなおすといった、抜本的な対策も望まれる。

温暖化が不可避である地球の将来を考えれば、費用対効果が小さい焼け石に水的な（完全に否定するわけではないが）二酸化炭素削減対策だけでなく、気候変動に伴う災害防止策としても河川空間を広げておくことが必要があるのではないか。これは、同時に人口減少に伴い、コンパクトで安全なコミュニティを維持するための都市計画の練り直し策としても有効なはずである。

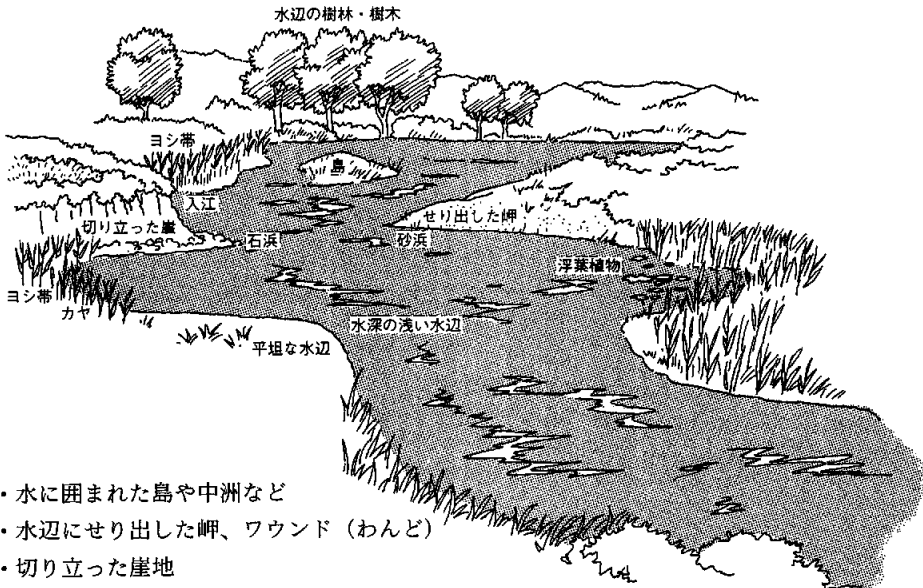
さしあたっては、草原性鳥類全てを絶滅危惧種にしてしまわないために、これ以上、高水敷にパークゴルフ場やサッカー場を造成する余裕はない

水域と陸域の接点の多様性の確保

「北海道環境配慮指針・公共事業編」（北海道、1997）から

水域と陸域との接点は環境の異なるデリケートな部分であり、同時に環境が徐々に変化していく場所で、水生生物をはじめとした多様な生物の生息場所として重要である。

水辺の多様性の確保



- ・水に囲まれた島や中洲など
- ・水辺にせり出した岬、ワウンド（わんど）
- ・切り立った崖地
- ・平坦な水辺、入り江、河岸の凹凸
- ・水深の浅い水辺、泥湿地、ヨシ帯

出典：山口県環境配慮事例集 1995 を一部改変

し、利便性だけを考えた草刈りを続けていく猶予はないのである。